

本美濃紙 / 旧今井家住宅倉

旧今井家の住宅の裏には 4 つの蔵があり、それぞれが防火用に分厚いしっくい保護されています。今井家は、江戸時代（1603～1867 年）から 20 世紀初頭にかけての裕福な和紙問屋で、美濃の庄屋または長（市長のようなもの）を務めていました。蔵（くら）は、一族の商品や最も大切な財産を保管するために使用されていました。現在、3 つの蔵には、美濃地方の歴史や建築に関する遺物や資料のコレクションが収蔵されています。

また、蔵の 1 つには、うだつ保全地区の多くの商人の家を守ってきたうだつ（防火壁）の写真や復元物が展示されています。これらの防火壁は屋根よりも高い位置まで伸びており、屋根から隣の家へと火が燃え広がるのを防ぐためのものでした。うだつには瓦が乗っていて、前面には家紋や鬼瓦が付されていました。うだつ付きの家を建てるのにはお金がかかり、次第に富の象徴となっていきました。

また、別の倉庫では、美濃の春祭りの夜に道端で演じられる、愉快的な話と音楽を組み合わせた伝統芸能「美濃流し仁輪加」の展示も行っています。展示では、実物大の太鼓台のレプリカに煌びやかな和紙提灯が飾られ、囃子方に扮した人形が置かれています。一番大きな蔵には、歴史的な写真や資料が保管されています。展示されている写真は、1911 年に名古屋と美濃を結んだ最初の電車や、1916 年に完成した長良川の最初のつり橋など、歴史的な風景を捉えています。